日刊 動労千葉

87. 10. 16

No. 2679

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄「分割・民営化」反対！三里塚二期工事阻止！

戦争へ直結する産業報国会化の流れに抗して闘いぬき

労働運動の帝国主義的再編許すな

第12回定期大会の成功に向け（シリーズ5）

強権的支配確立を目指す日帝・中曽根

高度成長の終えんと長期停滞・不況の時代への突入は、急激に体制の危機をもたらしつつある。世界を覆いはじめた不況の波は、何度も繰り返される協調会議や政策的・金融的テコ入れ、為替操作などで解決のつく性格のものではない。ひと言でいって三たび戦争へと行きつかざるを得ない底知れぬ深さをもった危機である。戦後四〇年間、積もりに積もってきた資本主義体制の根本的な矛盾が一気に噴き出そうとしている。

社会を構成する全ての関係、一切がっさいの問題が否応なしに、今までどおりにはいかなくなっているのだ。しかし、このことを最も敏感に察知し、いち早く手を打ってきたのは残念ながら労働者の側ではなく、支配者の側であった。

中曽根が掲げた「戦後政治の総決算」とは、まさに支配者階級の側からの激しい現状変革の意思の表明である。ここで目指されているのは、国家そのものの再編・改造＝スクラップ・アンド・ビルドである。今までの価値感（平和、民主主義、議会政治、諸権利・・・）を全面的に否定し、覆えすことを柱として行きつくところは国家の機能を国防と治安に特化させようとしているのである。つまり、中曽根は、現下の危機を突破するために、全ての犠牲を労働者人民に転嫁したうえで、帝国主義的軍事力の形成と（戦争のできる）強権的な支配体制を確立する以外にないと判断し、踏みこんできたのである。

戦後的常識を覆し、戦争へ突進する日帝

この数年間にわたって吹き荒れた（そして現在も続いている）国鉄労働運動解体攻撃は、今までの常識、価値感を全て覆えそうとする支配者階級の意図が最も典型的に示されたものである。そこでは二〇万人という戦後かつてない大量首切りが強行され、戦後の労働運動のあり方、諸権利の体系、完全雇用・終身雇用制、「公共性」の考え方など今までの常識が徹底的に攻撃され手をつけられたのである。

われわれは、このような視点から国鉄労働運動解体攻撃と、また、その攻撃に対して国鉄労働運動がどのように対決したのか（またし得なかったのか）、徹底的に総括を深めなければならない。なぜなら、今、国鉄を襲った事態が全社会で展開されようとしているのである。教育（臨教審）、政治制度（議会制の否定、内閣機能強化）、税制（大型間接税）、諸法規（労基法改悪）、国家機密法制定など）治安（警察権力の肥大化）、そして労働戦線の帝国主義的再編（全民労連結成、総評解散）など、この全てが完成したときは、まさに労働者が奴隷に堕し、窒息するような独裁社会ができあがり、戦争へ突進するときである。

体制変革の思想を貫く労働運動の総決集を

このような政治反動の嵐のなかで、これと真向から対決しえない労働運動が全く無力であることは明らかである。八〇年代に通用する労働運動の構想は、時代が重大な転換期にさしかかっていることをはっきりと認識し、労働運動においても、今までの常識や価値感が通用しえないことを明確にさせるところから出発しなければならない。体制変革の思想、帝国主義と真正面から対決する立場と路線が労働運動にも問われているのである。労働運動の総屈服状況を突き破って動労千葉が一波・二波のストライキを決断し、うちぬくことができた根拠は、国鉄労働運動解体攻撃が日帝の存亡をかけた国家改造攻撃の一環であり、柱である以上、中途半端な対応や妥協はあり得ないことをはっきりと認識し、その立場でハラを固めることができたからである。そして動労千葉のみが今日、闘いの勝利を総括できるのである。

また、動労千葉があらゆる困難をうち破って闘いの道を決断しえたのは、自らの足元のみに目を奪われることなく、三里塚労農連帯の闘いをはじめ、常に支配者階級との闘いの最先端に身をおき、その実力闘争の立場を学びとってきたからである。

現在中曽根は、国鉄・三里塚・沖縄という労働者人民の闘いの拠点を叩き潰し、遂に、国民統合の中核として、天皇制を前面に登場させようとしている。

われわれは、今こそ帝国主義的再編＝産業報国会化の危機にたつ労働運動の流れに抗して、体制変革の思想を貫く労働運動の総結集に向けて、その先頭にたたなければならない。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！